

生産獣医療支援センター 吉村遥子

まだ学生であった一昨年、津山で実習をさせて頂いたことがきっかけで、岡山県そして NOSAI 岡山の魅力を知ってしまい、昨年4月、生まれ育った東京から直線にして遥か 550 km の岡山県農業共済組合連合会に就職しました。

同じ日本国内なのだから、日本語は通じるし、それより何より牛の獣医師になりたい！と思い、牛について何も知らない不安はあったものの、初めての場所、初めての仕事にワクワクしながらやって来ました。

たくさんの山の緑と広い空、しかもほとんど毎日が快晴、そして季節ごとに変化する田んぼ、スーパーや病院の駐車場には軽トラックが並ぶ、という私からすればほぼ全てが初めての光景ばかり。農家さんの仕事には季節性があることも驚きでした。

最初は、ホルスタインと和牛の区別しかできず、ジャージーやブラウン・スイス、ガンジーなどが出来た日には、もう何がなんだか分かりませんでした。牛舎に並んでいる牛たちは、全部同じ顔、同じ体型にみえました。しかし、しばらくたったある日、牛舎を歩くと、牛たちの顔が全部違うことに気が付きました。人間の顔が全て違うように、私はそんな当たり前のことにも気がつく余裕がなかったのだと思います。その日を境に、初対面の牛に出会うのが楽しくなり、一頭一頭の牛の性格の違いを知るのが面白くなりました。

また、診療時の牛の様子は、いつもお世話をしてくれる農家さんがいるかないかだけで、全然違う場合も多く、もともと臆病な牛からすれば、いつも可愛がってくれる農家さんがいない間に、不審者が近づいてきて体をべたべた触られ、トントンたたかれるなんてことはかなりの恐怖だろうと思います。そこで、先輩獣医師からヒントを得て、農家さんのいない牛舎で牛に近づくと、「こんにちは～」と牛に声をかけながら近づいてみました。すると、牛がキョトンとしているうちに傍まで寄れました(農家さんがいるときは恥ずかしいのでやりませんが)。

岡山に来て 10 ヶ月以上経過した今でも困ることが、岡山弁です。なまりの強い農家さんに初めて一人で行った時は、言葉の通じない私に何度も言い方を変えて説明して下さるものの、私は満点を取らなければならない外国語の聞き取りテストをしている気分。稟告をとり治療方針を相談するだけで、農家さんも私もくたくたになってしまいました。農家さんと先輩獣医師が話している時など、私はいつも仲間はずれです。岡山弁も牛の診療も、経験と知識が必要だと感じさせられます。

一人で診療に行かせてもらうようになってから、本当にたくさんのことを農家さんから教えて頂きました。牛のつかまえ方や病牛の見つけ方、さらには聴診器がなくても第四胃変位を見つける方法など、忙しい農家さんの手を止めさせて、質問攻めにしてしまうことも少なくなかったように思います。またこの前、「きれいになったね、自信がついたんじゃない？初めはどうなるかと思ったけど(笑)」生まれつき不安そうな顔つきの私にとっては、とても嬉しいお言葉でした。今はまだまだ農家さんから元気をもらい、学ばせて頂くことばかりですが、早く、農家さんの役に立つ仕事ができるようになり、信頼できる獣医師になりたいと思っています。

